

る間に、人々聞つけて集りしかば、狼は即走さりたり、さて彼女を物にのせたるまでは尙詞たしかに、主の子の故なきよしを告しかば、道にて息絶たり、やがて其親のもとへ昇入たるに、主の妻も聞て、かけり來れるに、綱が母幼兒をわたして、血にはまみれ給へど、つゆばかりあやまちせさせ奉らざりしを、悦びはべるといへり、此母もたゞものにはあらざりけり、此ことを國の守聞し召て、二なく憐がり給ひ、大なる石礪をたて、忠烈綱女の墓とまゐらし、銘は儒臣小野忠次郎に命じて、か、せ給ひ、三日大佛事をおこなはれ、遠近の人々も詣詩歌の作こゝろ、く、に手向ぬと聞えし。

〔雲萍雜誌〕江戸に諸崎某といふ人あり、予○柳澤が母かたの縁にして、豪富の米問屋なりしが、

ある年伊勢參宮のかへるさに、遠州佐夜の中山に休らひ、ところの名物館の餅を食ひける時、○中略 諸崎はあるじにむかひ、幼き兒を負ひたる童は、いづこの家のものぞと問へば、この山かげなる農夫の子にて、○中善をかたりて悪をいはねば、あはれみ養ひ侍りぬといふに、諸崎まきりにほしくといへば、それこそ彼が幸ならめと、母と兄とに告げやれば、よろこび來りて、主と、もに奉公の事ねぎつれば、主從契約して、中山にて得し者なればとて、名を中吉と改め召し仕ふに、十年の勤め私なく、すべて主人の非をあげ、諫むることまば、なれば、つひにはうるさく思はれ、忠言耳にさかふのならひ、はては不興をうけ、二十の年に身を退き、ねもごろにせし方を頼みて、まばしがほどは忍びけり、斯れば諸崎のみにかぎらず、財集まれば奢れるならひ、己れに儉を守るとすれども、おのづからゆるす心のいできて、○中略 名におふ豪富の家なれども、つひに財寶を分散して、あるじは逆井といへる、片田舎に潛み隠れ持ちつたへたる調度のたぐひを、けふりの代となしつゝ、も、三とせばかりを送れるうち、身は生を養はざるに勞れ、住家は明暮の乏しきに壞れて、疫にかされ、病重りて死を待つばかりといへども、訪ふ人だにもあらざりしが、彼中吉